

# 中国故事人物図 横川景三賛

存が良好なことから容易に察せられるところであり、加えて、図と題詩には障屏画等にまみうけられる無数の擦傷や剥落等も認められる。さらに、図と題詩の紙質が異なることも合わせ考えると、本図の元の形状としては、各扇の上方に題詩、下方に図を別々に貼り付けた、いわゆる貼付屏風——例えば、等春筆「花鳥人物図（景徐周麟贊）」のような——のうちの三扇分とみるのが妥当ではないかと思われる。現在この三幅は、中幅に「朱買臣図」、左右にそれぞれ「昭君弾琵琶図」と「東坡笠屐図」を配する三幅対として一つの箱に収まるが、試みに「昭君弾琵琶図」と「朱買臣図」の位置を入れ替えてみたところで、何ら違和感は覚えない。こうした位置関係の曖昧さをもつてしても、本図が当初三幅対として制作された可能性の小さきことが了解されよう。

本図（図2・10）は大正八年から昭和十六年まで、当時の京都帝室博物館に寄託されていたものである<sup>(1)</sup>。無款ながら、狩野安信によつて「小栗宗丹筆」と鑑定された極状が付随するところから、戦前は宗湛筆の真作とみなされ、かなり広く知られていたものらしいが、戦後に至つてはその存在すらも忘れ去られてしまつた感がある。後述するように宗湛筆の伝承はあたらないにしても、図上に高名な五山文筆僧である横川景三の題詩をもつ本図は、十五世紀にまで遡る人物画の遺例として貴重と思われる所以で、ここに紹介することにしたい。

さて、題詩者である横川景三（一四二九～九三）は、既述のように東山時代の文学僧であり、晩年には鹿苑僧録まで務めた尊宿としてよく知られている。はじめ相国寺の英叟、ついで夢窓派の龍淵本珠に参じ、その法兄曼仲道芳の塔を拂してその法を継いだ。学問の修練は主として瑞渓周鳳から受け、自ら瑞渓の老門生と称したという。応仁の乱の際は近江に逃れていたが、乱ののちは京都にもどり、相国寺常徳院の側の小補軒で順調な生活を送つてゐる。画家との交流も非常に盛んであつたようで、相阿弥、狩野正信らとの直接的な交流を示す記事が『蔭涼軒日録』にみえる他、当代一流の画家の作品に数多くの着贊を試みている。なかでも、芸阿弥が一種の印可の証として祥啓に描き与えた旨を記す「観瀑僧図」（根津美術館蔵）の後序は夙に有名である。

本図に賦された横川の題詩は次の通り。

—

この三幅はいずれも、図・題詩・補紙の紙質の異なる三紙からなるもので、図の上方に補紙が継ぎ足され、その補紙の上に直に色紙の大の題詩が貼付されるという、珍しい形状を有している。もつとも、かかる形状が当初のものでないことは補紙のみ図や題詩に比して保

（各）縦七三・八cm 横四二・五cm  
紙本墨画淡彩  
室町時代  
京都 妙心寺 大心院蔵

三幅

昭君彈琵琶

胡塵吹面側花鉗  
縱畫麒麟亦可憐  
只有漢家天上月  
斷腸淡照琵琶絃

小補印

東坡笠屐圖

瓊海玉堂過即同  
天將笠屐戲吾公  
爛腸五斗髮千丈  
犬吠蠻村烟雨中

印

朱買臣

坐則讀書行採薪  
拍肩野老與山人  
君恩一旦會稽守  
雨笠烟蓑錦綉春

印

いずれも七言絶句の形式を取るもので、流麗な行書体で書され、その後に「横川」白文方印一顆が捺されている(図11)。「昭君彈琵琶」にのみ彼の別号である「小補」の款記が入るが、既述のごとく本図が元は貼付屏風の一部とみられることからすると、この題詩および図は屏風の左端もしくは右端に貼付されていたということになる。ともあれ、これらの題詩が横川の自筆に間違いのないことは、例えば「芙蓉花図」(正木美術館蔵)の図上に賦された同じ彼の七言絶句(図12)の筆跡と比較すれば明白であろう。また「横川」白文方印については、先の「觀瀑僧図」に捺された印と同印と判断される。

ところで横川の詩文集は自筆本が尊経閣文庫にあり、ほぼ年代順に配列されている。これらの詩もその中に収録されているのであるが<sup>(4)</sup>、ただ各詩とも作詩の時期にかなりの隔たりがある他、「昭君彈琵琶」は「明皇貴妃並笛」と一対をなす画軸に賦されたもの<sup>(5)</sup>、さらに「朱買臣」に至っては扇面画への題詩であることが知られるので、本図の題詩は旧作が使用されたということができる。これは決して珍しいことではないが、図の制作時期との関連で、詩の題された年代を特定しえないので惜しまれるところである。しかし旧作である以上、その題詩の時期は詩文集に記載の三詩の題詩年代よりも後とみて差しつかえないと思われるから、大まかではあるが、題詩時期の一応の上限は設定できる。即ち、詩文集によると「昭君彈琵琶」は文明七年(一四七五)の冬頃、「東坡笠屐圖」は同十六年(一四八四)の秋から冬にかけての頃、そして「朱買臣」はそれよりもさらに後れる同十八年(一四八六)の冬頃と推定される位置にあるところから、上限は文明十八年の冬ということになる。むろん下限は、横川の示寂した明応二年(一四九三)である。従つて、図の制作時期もこの数年の間に置かれることになる。

図については、先述したように保存にやや難があり、加えて樹木や岩などの輪郭を濃墨線でなぞるなどの補筆の跡も指摘される。その点でかなり画趣が損なわれていることは否めないが、幸いなことに主題である各人物に補筆の痕跡はなく、また岩や樹木についてもその形態自体は当初のそれを保持しているとみてよい。描法は三図とも謹直な楷体の手法に拠るもので、諸人物や樹葉、馬など、墨の濃淡や細線をもつて丁寧に処理されている。また各人物の面貌や手足、衣服、馬体等には淡く彩色が施されており、「東坡笠屐圖」の東

坡の着衣の一部にはわずかながら胡粉の使用も認められる。

## 一一

ここで各図の画題や図様等について一通り略述しておこう。先ず「朱買臣図」であるが、主役の朱買臣は漢の武帝時代の官僚で、字は翁子。学を好みながらも家貧しきため薪を売つて生計の資とし、のちにその甲斐あつて会稽太守の地位にまでのぼつた。いわゆる立志伝中の人物である。本図にみる朱買臣は大樹の根元あたりに腰をかけ、左手に書物を持した姿をもつてあらわされており、背後には書物と同じく彼のトレードマークともいいうべき薪の束が布置されている。また前方には竹笠や鉢なども配されるが、これらは採柴のあとであることを暗示しているのであろう。

ところで朱買臣を描いた作例としてすぐさま想起されるものに元信一派の手になる旧大仙院障壁画中の一作（東京国立博物館蔵）がある。しかしその像容は、薪を肩にかつぎ片手に書物を持って歩くさまをとらえたものであり、本図のそれとは大きく相違する。また「探幽縮図」にも等春筆や永徳筆とされる朱買臣図が見出されるが、それらも、左右逆写しの違いなどはあるものの、やはり旧大仙院本とほぼ共通した姿態をもつて描かれていることが解る。その点からすると、本図の像容自体は、単なる粉本の継承といつたものではなく、かなりつよく筆者の創意が働いているところもあるかもしれない。次に「昭君弾琵琶図」について。これは戯曲「漢宮秋」にも脚色されて有名な『漢書』の匈奴伝の故事に基づき描かれている。要約すると、後宮一の美女であった王昭君は、画工毛延壽に賄賂を贈ら

なかつたばかりに肖像画を醜く描かれ、ために匈奴との親和政策の犠牲となつてその酋長呼韓邪单于のもとに嫁す、というものである。本図の場面は、この哀話のいわばクライマックスにあたり、王昭君が塞外に旅立つに際し馬上で琵琶を奏するところがあらわされている。他にこの出塞の場面を描くものに、琵琶を携えた王昭君が馬に乗り伴の者を従えて行旅するといった図様の、いわゆる「明妃（昭君）出塞図」と呼ばれるものがある<sup>(8)</sup>が、広い意味ではこの彈琵琶図も出塞図の一バリエーションとしてその中に含めてよいものと思われる。明代の頃になると、かかる出塞の場面は、風俗画の画題として大いにもてはやされたらしい<sup>(9)</sup>。そうした遺品には恵まれないが、「探幽縮図」にその頃の作とおぼしき王昭君の図<sup>(10)</sup>（図13）が写し取られており注目される。それは立姿の王昭君が琵琶を奏てる像容であつて、馬上に布置されたものではないが、面貌や琵琶を弾くポーズ、さらに結髪や衣服などの描写には、本図のそれとかなり似かよつた特徴が看取できる。おそらく本図の像容自体は、こうした明代頃の舶載画をもとに描かれたとみて大過ないであろう。

なお、王昭君の伝説をテーマとした作品は、中国での流行を反映してか、我が国でも盛んに制作されていたようである。例えば『翰林五鳳集』や五山僧の詩文集等を参照したところでも、そこに採録された題詩はかなりの数にのぼり、その盛行ぶりを伝えている。また『等伯画説』には、阿波の讃州、即ち細川成之（一四三五～一五一二）の手による「王昭君カ馬上ニテ琵琶ヲ引畫」を等伯が実見した旨のことも記されており、十五世紀末から十六世紀前半頃にかけて、本図と像容を同じくするとみられる作品が描かれていたことをうかがわせる。しかしながら、こと遺品となると、その制作時期が中世に

まで遡るものは管見の限り皆無であり、その点においても本図は貴重な作例といふことができよう。

三つ目の「東坡笠屐図」は、『梁溪漫志』記載の逸話に基づいている。即ち、東坡が儋州に配流されていた時、友人を訪ねて雨にあり、農家から竹笠と下駄を借りて帰ったところ、その奇妙な風態をみて女子供が笑いころげたという軽妙な内容のものである。本図においても、定石通りこの竹笠と下駄があらわされて「東坡笠屐」の画題であることを暗示している訳であるが、加えて髭面の東坡の容貌と、彼がやや前屈みになり衣の裾をたくしあげて歩くさまは實に滑稽で、観る者の笑いを誘う。まさに題意にふさわしい像容といえよう。

もつとも、かかる像容については、京都国立博物館西上実氏より中國にその先例があるとのご教示を得た。『大陸雜誌』第四十卷所載の「東坡笠屐図」がそれであって、同誌上では北宋の李公麟筆とされるが、西上氏によれば明代頃の作である可能性が高いといふ。いずれにせよ本図に見る笠屐図の像容は、そうした中国画をもとに成立したと考へてよいであろう。同じ像容をもつわが国の笠屐図の先駆例としては、贊者惟肖得巖の示寂した永享九年（一四三七）を制作時期の下限とする「蘇東坡図」（図14）が知られており、これによつて遅くとも十五世紀の前半頃には既にこの種の笠屐図の描かれていたことが確認される。

ここで、他に同じ像容をもつ笠屐図を挙げると、先ず図版等での存在が知られるものに「元信」印を捺す「東坡笠屐図」（本能寺蔵）と、その画風から元信周辺画人の作とみられる月舟寿桂贊の「東坡風水洞詩意図」（図15）の二点。さらに、「探幽縮図」に写し取られたものとして、探幽により「雅樂助筆也」と鑑定された横川景三

贊の「東坡笠屐図」<sup>(14)</sup>及び「古法眼正筆」と添書きされた「東坡笠屐図」<sup>(15)</sup>などがある。興味深いのは、それらがいずれも狩野派の手になるか乃至はそのように鑑定されている点であり、かかる像容の作品が狩野派の専売特許とはいえないまでも、十五世紀末から十六世紀の前半頃にかけて、とくに狩野派によつて数多く制作されていたことが想定されてくる。次に触れることになるが、このことは款印をもたない本図の筆者問題を考える上にひとつ目の目安になるものと思われる。

### 三

本図の筆者については、既に冒頭で触れたように、狩野安信によつて小栗宗湛の筆になると見方が示されている。しかし、画面に筆者を明示するような款印の類が見当たらないことに加え、宗湛の基準作にも事欠く現在の状況では、ただちに安信のこの見解に信をたと考へてよいであろう。同じ像容をもつわが国の笠屐図の先駆例としては、贊者惟肖得巖の示寂した永享九年（一四三七）を制作時期の下限とする「蘇東坡図」（図14）が知られており、これによつて遅くとも十五世紀の前半頃には既にこの種の笠屐図の描かれていたことがある。

先ず樹木の描法であるが、これは三団ともかなり似かよつた特徴が指摘される。ひとつは、樹木の立体感を表出するために、淡墨をもつて樹幹等に陰影を施している点、ふたつ目は、樹皮を細やかに表現しないかわりに、虛を随所に描き込むことによって巧みにその質感をあらわしている点である。なかでもこの虚は樹幹ばかりか樹枝にまで描き込まれており、本図の樹木表現におけるもつともきわだつた特徴をなすものといえる。

次に岩法であるが、岩は「朱買臣図」と「昭君弾琵琶図」の両図に見出される。前者のそれは比較的横長の形状をもつもので、岩頭部分が黒く塗られ、さらにその岩頭から斜め下方に向けて長目の皴が打たれている。興味深いのは、この岩の向って右下方部分にみる、短い線を平行に重ねていく独特の肉付けの仕方であつて、これによつてその形態は岩とというよりもあたかも木片のごとき雰囲気を呈する。後者の岩は、その形態こそ前者のそれとは異なるものの、岩頭部分を黒く塗り、さらにその上に皴を打ち込むなど、同一の手法に拠つていることが了解される。ただし、この岩の手前の部分を白く抜き、そこに小刻みな皴を打ち込む手法は、前者の岩には見出しえなかつたものとして注目される必要がある。

さて、ここまで、樹木と岩の表現について観察を進めてきた訳であるが、かかる特徴を合わせもつて作例を他に求めると、唯一想起されるのが、狩野正信筆の伝承をもつ「竹石白鶴図」屏風（図16）真珠庵蔵である。先ずこの屏風の第五～六扇に布置された樹木に着目すると、樹幹の立体感を淡墨をもつて簡潔に表わしている点や、同じく樹幹に虚を数多く描き込むといった点で、本図のそれと似かよつた特徴が看取される。また、第一～二扇下方の岩は、全体の形態において「朱買臣図」のそれと近似するばかりか、岩頭部分を黒く塗るところにも共通点が指摘される。さらに第二～三扇に描かれた岩には、「朱買臣図」の岩の大きな特徴のひとつであった、木片を想わせる独特的の肉付けも試みられているのである。<sup>[16]</sup>一方、第五～六扇下方に配された岩は、多くの点で「昭君弾琵琶図」のそれと共にした特色を有している。ひとつは岩頭部分を黒く塗り、その上から長目の皴を打ち込んでいる点、ふたつ目は岩の手前の部分を白く抜

いて立体感を強調している点である。しかも、この白く抜いた箇所に皴を小刻みに打ち込むところも、両者の見逃しえない類似点といえよう。

この「竹石白鶴図」屏風については、周知のように、正信真筆の確証は得られないまでも、およそ十五世紀末から一六世紀初頭の狩野派の遺例と見る点ではおおむね見解の一一致するところである。そのことからすれば、両図のかかる類似が同一筆者の手になることに起因するか否かはひとまず置くとしても、少なくとも本図が、この屏風の筆者と活躍期を同じくする正信周辺の狩野派画人によって描かれたと考えることは許されてよいものと思われる。その点、本図の制作時期がこの屏風の推定制作年代の範疇である文明末から明応期頃に位置するという先の事実は、その蓋然性をいつそう高めることになろう。

本図の筆者を狩野派に比定する根拠は、何もこればかりではない。既に指摘しておいたように、「東坡笠屐図」と像容を等しくする作品が狩野派によって多数制作されていたことも、この際配慮される必要があろう。この点についてさらに言えば、本図と月舟寿桂賛本（図15）の間には、惟肖得巖賛本（図14）に比べ、東坡の面貌や竹笠等の細部描写において、單なる像姿の類似にとどまらない親近感もうかがわれる所以である。しかし、それ以上にここで注目すべきは、本図の樹木や岩以外の景物表現にも狩野派的な手法が看取されることにある。例えば「昭君弾琵琶図」の馬の描法がそれであつて、その容貌や馬体にみる筋肉の付け方など、正信の筆になる「足利義尚像」（地蔵院蔵）や元信の若描きとされる「細川澄元像」（永青文庫蔵）などのそれと軌を一にしていることが了解される。また、「朱買臣図」

に布置された壁のごとき懸崖についても、正信印を捺す「山水図」（長林寺蔵）や大仙院旧蔵の伝元信筆「中国故事人物図」（東京国立博物館蔵）などの懸崖をはじめとして、多くの類例が見出されるのである。

現在までに確認される、いわゆる伝正信画は、先の「竹石白鶴図」屏風や「足利義尚像」の他、扇面画などの小品も加えるとおよそ十数点程にはなる。ただ、それらの画風の間には、これまでたびたび論じられてきたように、微妙な懸隔が存在し、それが正信画の編年を意味するものか、あるいは周辺画人の作品の混入による結果なのか、いずれとも決し難い状況にある。このようないわば混沌とした状況の中で、本図を位置づけるという試みは決して容易な作業とは思われない。しかしながら、それを伝正信画に限らず、元信画も含めて広く考えてみると、存外、本図の位置といつたものも把握され得るのではないかろうか。結論から先に述べると、本図は一部で古様を伝えながらもその一方で、次代の元信画に繋がっていく要素も備えた作例として注目されるのである。本図における古様な部分としては、例えば樹木の手法を挙げができる。かつて土居次義氏は「竹石白鶴図」屏風のそれについて、「まだ元信画の樹木のよくな美しい装飾的形態をもつにいたっていない」と指摘されたが<sup>(15)</sup>、この言はそのまま本図の樹木表現にもあてはまるものといえよう。

既に述べたように、本図の描かれた文明の末から明応期頃は、狩野派にとってみれば、ちょうど正信を棟梁とする時期に相当する。本図の制作時期の下限である明応二年（一四九三）を仮に例にとると、正信の年齢は六十歳、元信においてはわずか十八歳にすぎない。しかししながら、ここで本図と元信画との関連性が指摘されたことは、この時期が正信の活躍期であると同時に、元信様式成立に向けての、いわば準備期間にもあたることを予測させる。<sup>(16)</sup> その意味で、筆致こそ違え、本図と同じく伝正信画の中では多分に平俗な雰囲気をもつかしながら、ここで本図と元信画との関連性が指摘されたことは、

な大仙院旧蔵の「禅宗祖師図」（東京国立博物館蔵）と本図を比較してみても明らかかなように、両図の人物に、その意味内容、換言すれば深い精神性・内面性といったものを看取することは難しい。むしろその形態自体の面白さに主眼の置かれていることが両者の共通点としてつよく指摘できるのである。要するに東山水墨の伝統に存する禅宗的要素の払拭がここに意図されているのであり、両者にうかがわれる明るい、平俗な雰囲気は、これに起因するものとみなされることは伝正信画にも程度の差こそあれ看取されるところではあるが、反面、その多くが未だ中世的な幽暗さを共存させていることも否定しえない。その中にあって、先の「竹石白鶴図」屏風や、景徐周麟の贊をもつ「崖下布袋図」などは、そうした「暗さ」を排除することに成功した稀有な作例とみることができる。もちろん本図についてもこれと同様のことが指摘されるのであって、その存在意義も正にこの点に認められるといえよう。

既に述べたように、本図の描かれた文明の末から明応期頃は、狩野派にとってみれば、ちょうど正信を棟梁とする時期に相当する。本図の制作時期の下限である明応二年（一四九三）を仮に例にとると、正信の年齢は六十歳、元信においてはわずか十八歳にすぎない。しかししながら、ここで本図と元信画との関連性が指摘されたことは、この時期が正信の活躍期であると同時に、元信様式成立に向けての、いわば準備期間にもあたることを予測させる。<sup>(16)</sup> その意味で、筆致こそ違え、本図と同じく伝正信画の中では多分に平俗な雰囲気をもつかしながら、ここで本図と元信画との関連性が指摘されたことは、

(一四九六)から同九年の間に位置することは、単なる偶然とはみなしづらいものがある。

#### 四

最後に、本図の制作の経緯等について私見を述べておきたい。

本図を所蔵する大心院は、明応元年(一四九二)、細川政元が妙心寺十世景川宗隆を勧請開山に迎えて創建した塔頭である。<sup>(21)</sup> いうまでもなく政元(一四四六~一五〇七)は細川勝元の子であつて、足利家の衰微に乗じて、將軍義植およびこれを奉ずる畠山政長との争いに勝ち、明応二年には足利義澄を將軍に擁立。自らは管領となり、幕府の実権を掌握したことで知られている。ところで本図との関連でここで注目したいのは、この政元が横川・正信の両者と深い係わりをもつていたという点にある。先ず横川であるが、彼の晩年期は主として細川氏一門の外護下にあつたことが既に玉村竹二氏により指摘されている。<sup>(22)</sup> 例えは、横川の住した小補軒を建て与えたのが、他ならぬ政元の父・勝元であつたことなどは、その良き証左といえるであろう。<sup>(23)</sup> さらに政元も、彼に着贊を依頼したり、次に述べる游初軒の新造祝いの詩会に招くなどの密接な交流の跡もうかがわれる。

一方、政元と正信の関係については、『蔭涼軒日録』の記事によつて、容易に推察することができる。長享二年(一四八八)五月七日条によれば、正信が蔭涼軒を訪ね、この五、六十日間大津の政元の陣所に居たことを述べている。<sup>(24)</sup> その用向きが何であつたか定かではないが、長期間の滞在であつたことからすると、彼がそこで障壁画制作に従事していた可能性は充分に考えられる。加えて、延徳三年(一

四九二)六月九日条には、游初軒に正信の手になる座敷絵の設えられていたことが記されている。<sup>(25)</sup> 游初軒は文明十八年(一四八六)七月に政元により新造されたものであるから、かかる制作が政元の命により行われたことは疑いえないところといえよう。なお、政元が関与したという確証はないものの、延徳四年(一四九二)六月八日条によつて、正信は細川氏ゆかりの岩栖院(満元の菩提所)にも座敷絵を描いていたことが知られるのである。<sup>(26)</sup>

さて、このような三者の親密な交流関係を勘案すると、本図が大心院に伝来すること自体に甚だ大きな意味があることに気付かれよう。即ち、本図制作の依頼者として、また横川に着贊を需めた人物として、大心院の創建者である政元の名が浮かび上がつてくる訳である。しかも興味深いことに、大心院の創建時期は本図の推定制作年代の中に図らずも位置している。その点、本図の制作依頼が同院の創建との関連でなされた可能性も示唆されるのである。

もつとも、これを裏付ける資料は一切存しない。加えて、本図が後世に他所よりもたらされた可能性を全く否定し去ることができないのもまた事実である。しかし、仮にこの推測が正しいとするならば、先の游初軒や岩栖院の座敷絵の失われた今、本図は正信時代の狩野派が、時の権力者であつた細川政元との関係で描いた、現存唯一の貴重な作品となるのである。

(山本英男)

〔注〕

1 京都国立博物館にのこる当時の寄託品台帳に拠る。なお、本図の存在については、京都市文化財保護課小寄善通氏から御教示を受けた。

2 斎藤隆三『書題辞典』(新古畫社、大正九年)の「朱賈臣」の項に、本図の所在等に関する簡単な記述がみえる。

3 十五世紀以前において、本図のごとき同種画題の組合せによる三幅対

形式の作例は、仏画などを除けばほとんど皆無に近い。この点においても、本図が当初三幅対として描かれた可能性の低いことがうかがわれる。

4 玉村竹二『五山文学新集』第一巻（東京大学出版会、昭和四十二年）参照。以下、本稿における題詩に関する記述は、すべてこれを典拠としている。

5 「昭君弾琵琶」詩に「軸贊」と記され、続いて「明皇貴妃並笛」詩に「同上」とあるところから、両図が双幅であつたことが解る。

6 「扇面 朱買臣 細川九郎源公請」とあるところから、細川政元の需めにより扇面画に詩を賦したものであつたことが知られる。

7 等春筆の「朱買臣図」は中村岳陵氏旧蔵の「探幽縮図」中に見出されるもので、図版は田中一松「等春畫說」（『國華』八八八、昭和四十一）所載。永徳筆のそれは、京都国立博物館「探幽縮図」上巻（昭和五十五年）に所載。

8 金時代の作とされる大阪市立博物館所蔵の「明妃出塞図」はその好例である。

9 辻惟雄「岩佐又兵衛」（集英社『日本美術絵画全集』十三、昭和五十六年）中の「王昭君図」の作品解説において、こうした指摘がなされている。  
文人画研究所『探幽縮図』（昭和六十一年）所載。因みに探幽はこれを仇英筆と鑑定している。

『東洋美術家寶集』第一輯下（明治四十五年）所載。

『京都名刹遺寶圖錄』（青谷文聖堂、大正十年）所載。

10 「国華」二九〇（大正三年）所載。本図は贊文の内容により「風水洞詩意図」とみなされているが、像容は明らかに「笠屐図」である。また贊文のこうした事実誤認に加え、贊の筆跡自体も寿桂のそれとは異なる。その点で問題ののくる作品といえるが、その画風からすれば十六世紀前半頃の元信周辺画人の作とみることに問題はないと判断される。

11 大倉文化財団『大倉集古館藏 探幽縮図』目録（昭和五十六年）所載。文人画研究所『探幽縮図』（前掲）所載。  
『禅林画贊』（毎日新聞社、昭和六十二年）所載の春莊宗椿贊「山水図」

（正木美術館蔵）は、太田孝彦氏により十六世紀前半の狩野派の作例とみなされているものであるが、興味深いことにその図の下方に配された岩の一部にもこれと類似した手法が認められる。

12 土居次義『元信・永徳』（講談社『水墨美術大系』第八巻、昭和四十九年）の作品解説参照。

13 14 15 16 17 18 19 「禅宗祖師図」の諸人物にみるこうした傾向については、辻惟雄「狩野元信」（三）（『美術研究』二七〇、昭和四十五年）の中で既に指摘されている。

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 889 890 891 892 893 894 895 896 897 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 989 990 991 992 993 994 995 996 997 997 998 999 999 1000 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1039 1040 1041 1042 1043 1044 1045 1046 1047 1048 1049 1049 1050 1051 1052 1053 1054 1055 1056 1057 1058 1059 1059 1060 1061 1062 1063 1064 1065 1066 1067 1068 1069 1069 1070 1071 1072 1073 1074 1075 1076 1077 1078 1079 1079 1080 1081 1082 1083 1084 1085 1086 1087 1088 1089 1089 1090 1091 1092 1093 1094 1095 1096 1097 1097 1098 1099 1099 1100 1101 1102 1103 1104 1105 1106 1107 1108 1109 1109 1110 1111 1112 1113 1114 1115 1116 1117 1118 1119 1119 1120 1121 1122 1123 1124 1125 1126 1127 1128 1129 1129 1130 1131 1132 1133 1134 1135 1136 1137 1138 1139 1139 1140 1141 1142 1143 1144 1145 1146 1147 1148 1149 1149 1150 1151 1152 1153 1154 1155 1156 1157 1158 1159 1159 1160 1161 1162 1163 1164 1165 1166 1167 1168 1169 1169 1170 1171 1172 1173 1174 1175 1176 1177 1178 1179 1179 1180 1181 1182 1183 1184 1185 1186 1187 1188 1189 1189 1190 1191 1192 1193 1194 1195 1196 1197 1197 1198 1199 1199 1200 1201 1202 1203 1204 1205 1206 1207 1208 1209 1209 1210 1211 1212 1213 1214 1215 1216 1217 1218 1219 1219 1220 1221 1222 1223 1224 1225 1226 1227 1228 1229 1229 1230 1231 1232 1233 1234 1235 1236 1237 1238 1239 1239 1240 1241 1242 1243 1244 1245 1246 1247 1248 1249 1249 1250 1251 1252 1253 1254 1255 1256 1257 1258 1259 1259 1260 1261 1262 1263 1264 1265 1266 1267 1268 1269 1269 1270 1271 1272 1273 1274 1275 1276 1277 1278 1279 1279 1280 1281 1282 1283 1284 1285 1286 1287 1288 1289 1289 1290 1291 1292 1293 1294 1295 1296 1297 1297 1298 1299 1299 1300 1301 1302 1303 1304 1305 1306 1307 1308 1309 1309 1310 1311 1312 1313 1314 1315 1316 1317 1318 1319 1319 1320 1321 1322 1323 1324 1325 1326 1327 1328 1329 1329 1330 1331 1332 1333 1334 1335 1336 1337 1338 1339 1339 1340 1341 1342 1343 1344 1345 1346 1347 1348 1349 1349 1350 1351 1352 1353 1354 1355 1356 1357 1358 1359 1359 1360 1361 1362 1363 1364 1365 1366 1367 1368 1369 1369 1370 1371 1372 1373 1374 1375 1376 1377 1378 1379 1379 1380 1381 1382 1383 1384 1385 1386 1387 1388 1389 1389 1390 1391 1392 1393 1394 1395 1396 1397 1397 1398 1399 1399 1400 1401 1402 1403 1404 1405 1406 1407 1408 1409 1409 1410 1411 1412 1413 1414 1415 1416 1417 1418 1419 1419 1420 1421 1422 1423 1424 1425 1426 1427 1428 1429 1429 1430 1431 1432 1433 1434 1435 1436 1437 1438 1439 1439 1440 1441 1442 1443 1444 1445 1446 1447 1448 1449 1449 1450 1451 1452 1453 1454 1455 1456 1457 1458 1459 1459 1460 1461 1462 1463 1464 1465 1466 1467 1468 1469 1469 1470 1471 1472 1473 1474 1475 1476 1477 1478 1479 1479 1480 1481 1482 1483 1484 1485 1486 1487 1488 1489 1489 1490 1491 1492 1493 1494 1495 1496 1497 1498 1498 1499 1500 1501 1502 1503 1504 1505 1506 1507 1508 1509 1509 1510 1511 1512 1513 1514 1515 1516 1517 1518 1519 1519 1520 1521 1522 1523 1524 1525 1526 1527 1528 1529 1529 1530 1531 1532 1533 1534 1535 1536 1537 1538 1539 1539 1540 1541 1542 1543 1544 1545 1546 1547 1548 1549 1549 1550 1551 1552 1553 1554 1555 1556 1557 1558 1559 1559 1560 1561 1562 1563 1564 1565 1566 1567 1568 1569 1569 1570 1571 1572 1573 1574 1575 1576 1577 1578 1579 1579 1580 1581 1582 1583 1584 1585 1586 1587 1588 1589 1589 1590 1591 1592 1593 1594 1595 1596 1597 1598 1599 1599 1600 1601 1602 1603 1604 1605 1606 1607 1608 1609 1609 1610 1611 1612 1613 1614 1615 1616 1617 1618 1619 1619 1620 1621 1622 1623 1624 1625 1626 1627 1628 1629 1629 1630 1631 1632 1633 1634 1635 1636 1637 1638 1639 1639 1640 1641 1642 1643 1644 1645 1646 1647 1648 1649 1649 1650 1651 1652 1653 1654 1655 1656 1657 1658 1659 1659 1660 1661 1662 1663 1664 1665 1666 1667 1668 1669 1669 1670 1671 1672 1673 1674 1675 1676 1677 1678 1679 1679 1680 1681 1682 1683 1684 1685 1686 1687 1688 1689 1689 1690 1691 1692 1693 1694 1695 1696 1697 1698 1699 1699 1700 1701 1702 1703 1704 1705 1706 1707 1708 1709 1709 1710 1711 1712 1713 1714 1715 1716 1717 1718 1719 1719 1720 1721 1722 1723 1724 1725 1726 1727 1728 1729 1729 1730 1731 1732 1733 1734 1735 1736 1737 1738 1739 1739 1740 1741 1742 1743 1744 1745 1746 1747 1748 1749 1749 1750 1751 1752 1753 1754 1755 1756 1757 1758 1759 1759 1760 1761 1762 1763 1764 1765 1766 1767 1768 1769 1769 1770 1771 1772 1773 1774 1775 1776 1777 1778 1779 1779 1780 1781 1782 1783 1784 1785 1786 1787 1788 1789 1789 1790 1791 1792 1793 1794 1795 1796 1797 1798 1798 1799 1800 1801 1802 1803 1804 1805 1806 1807 1808 1809 1809 1810 1811 1812 1813 1814 1815 1816 1817 1818 1819 1819 1820 1821 1822 1823 1824 1825 1826 1827 1828 1829 1829 1830 1831 1832 1833 1834 1835 1836 1837 1838 1839 1839 1840 1841 1842 1843 1844 1845 1846 1847 1848 1849 1849 1850 1851 1852 1853 1854 1855 1856 1857 1858 1859 1859 1860 1861 1862 1863 1864 1865 1866 1867 1868 1869 1869 1870 1871 1872 1873 1874 1875 1876 1877 1878 1879 1879 1880 1881 1882 1883 1884 1885 1886 1887 1888 1889 1889 1890 1891 1892 1893 1894 1895 1896 1897 1898 1898 1899 1900 1901 1902 1903 1904 1905 1906 1907 1908 1909 1909 1910 1911 1912 1913 1914 1915 1916 1917 1918 1919 1919 1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1929 1930 1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937 1938 1939 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949 1949 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2019 2020 2021 2022 2023 2024 2025 2026 2027 2028 2029 2029 2030

れたことが知られ、実際にこの日に詩会の挙行されたことが確認できる。

## 雲龍図

張徳輝筆

『陰涼軒日録』長享二年五月七日条、「晩來狩野大炊助來云。此五六十日在『大津』。與『京兆』同所。件々彼三昧話之。實異人也。」  
『陰涼軒日録』延徳三年六月九日条、「游初軒座敷畫狩野法橋所筆一見之。」

前掲注25参照。

29 28 26  
細川政元と正信の結び付きが強かつたであろうことは、次代の元信が、ともに政元の養子であつた澄元、高國の命により、それぞれ「細川澄元像」(永正四年)、「鞍馬蓋寺縁起絵巻」(永正十年)を制作していることからも容易に想像される。

30  
『陰涼軒日録』延徳四年六月八日条、「座敷畫一見如可。侍者延予見之。狩野法橋所筆。種々筆勢盡之。實可觀者也。」

### (付記)

本作品の調査では、大心院津田宗徹氏より多大なご便宜を賜つたが、平成元年四月に示寂された。ここに謹んで哀悼の意を表します。  
小稿の執筆にあたっては、大手前女子大学武田恒夫教授並びに関西大学山岡泰造教授から適切なるご助言を得た。また一部の写真については正木美術館学芸員高橋範子氏よりご提供いただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。

清、徐沁の『明画錄』は、卷五に「龍」の一項を設け、画龍を得意とした明代画家、牛舜耕・張徳輝・何雪潤・許端・釈龍の五人をあげ、その小伝を記載する。

しかし、彼らの款記を有する作品は従来図版に紹介されることもなく、その具体的な作風はほとんど知られていない。明代の工芸品において、龍の文様が盛んに用いられていることを考えあわせると意外な気がする。

太古より天の使い・神仙の乗り物として表現されてきた龍は、降雨の靈力を持つと信じられ、しばしば雲煙や波濤と組み合わせて描かれる。特に唐代後半の水墨画の勃興は、龍の雲や波間に隠顯する情景を一層迫力あるものにし、五代より宋初にかけての伝古・呉懷・董羽・董源、北宋の荀信・任従一、南宋の陳容・牧谿、元の張羽材・張嗣成父子等、数々の画龍の名手が現われた。

(各) 縦六二・二cm 横三五・八cm  
明 時代  
京都 個人蔵  
二幅 紙本墨画

京都 個人蔵

### はじめに